

太宰治「走れメロス」とシラー「人質」

石橋 邦 俊

長部日出男が、その著『桜桃とキリスト』第九章「美談の韻律」で述べているように¹⁾、「走れメロス」は、太宰治の作品の中で、特異な位置を占めている。太宰治についての一般的なイメージを決定していると思しい太平洋戦争後の作品群を除いても、その位置づけに、さほどの変化は生じないだろう。

この、友情の「美談」の素材を太宰治に提供したのは、直接的には、小栗孝則訳編『新編シラー詩抄』所収「人質 譚詩」(263～273ページ、以後、特に必要のない場合は小栗訳「人質」、もしくは単に「人質」等と記す)だった²⁾。ただし、このバラードから太宰治は、一人の男が、自分の生命の担保として暴君に預けた友人を請け出すために、困難に打ち克ちながら、自らの処刑場へ辿り着くという、作品の結構を借用しただけではなかった。「走れメロス」と小栗訳「人質」のつながりを発見した角田旅人も指摘するように³⁾、「人質」の少なからぬ部分を太宰治は引用・転用しているのである。長部日出男の論の進行⁴⁾を逆に辿れば、小栗訳「人質」という梯子に登って、太宰治は、既に手中に収めていた1人称独白体と異なる、「美談」の語り口へ手を伸ばしたと言える。

しかし「走れメロス」は、ジャンルや形式を異にした、詩「人質」の単なる「再話」ではない。小栗訳「人質」から太宰治が引き継ぎ、或いはそこに付加し変更したものを確認するために、まず、小栗訳「人質」の各連と、「走れメロス」の対応箇所を並記してみよう。「走れメロス」の引用には、筑摩書房版『太宰治全集』第四巻(1998年、289～303ページ)より、該当箇所の行番号を記しておく。更に、「走れメロス」中、「人質」より転用された箇所、並びに「人質」

の対応部に類似すると見なされる箇所には、下線を施す。

暴君ディオニスのところに

メロスは短剣をふところにして忍びよつた

警吏は彼を捕縛した

「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」

險惡な顔をして暴君は問ひつめた

「町を暴君の手から救ふのだ！」

「磔になつてから後悔するな」――

(28～44行)

メロスは、單純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはひつて行つた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懷中からは短剣が出て來たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであつたか。言へ！」暴君ディオニスは靜かに、けれども威嚴を以て問ひつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたやうに深かつた。

「市を暴君の手から救ふのだ。」とメロスは惡びれずに答へた。

「おまへがか？」王は、憫笑した。「仕方の無いやつぢや。おまへには、わしの孤獨がわからぬ。」

「言ふな！」とメロスは、いきり立つて反駁した。「人の心を疑ふのは、最も恥づべき惡徳だ。王は、民の忠誠をさへ疑つて居られる。」

「疑ふのが、正當の心構へなのだと、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて呟き、ほつと溜息をついた。「わしだつて、平和を望んでゐるのだが。」

「なんの爲の平和だ。自分の地位を守る爲か。」こんどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

「だまれ、下賤の者。」王は、さつと顔を擧げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹縮の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫言つたつて聞かぬぞ。」

君主殺害未遂という異常事の現場へ読者を一気に引き込む「人質」に対し、「走れメロス」では、(ここでは引用を控えたが、)メロスの生い立ちや人となりを紹介し、暴君殺害を決意するまでの経緯を描く27行の一段落が、作品の始め

に置かれている。この、一種の序段の簡潔な叙述と、冒頭の一文（「メロスは激怒した。」）を繰り返し、さらに「呆れた王だ。生かして置けぬ。」の発言で、シラスでの見聞を背景とした、物語の「現在」のメロスの決意を明示する、引き締まった構成感には、小栗訳「人質」の強い反響が見て取れるだろう。

「人質」第一連に比べ、「走れメロス」では、対論するメロスとデイオニス双方の性格ははるかに明瞭に提示されている。同時に、両者のコントラストにおいて、人間への不信と信頼という、「走れメロス」の中心線を成していくモチーフが、はっきりと提示されている。これに対し、小栗孝則が「誠」、そして「信實」の訳語を充てた“Treue”が、全20連からなるシラーの“Die Bürgschaft Ballade”において初めて登場するのは、第十六連なのである⁵⁾。

「私は」と彼は言つた「死ぬ覚悟である
命乞ひなどは決してしない
ただ情けをかけたいつもりなら
三日間の日限をあたへてほしい
妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ
その代り友達を人質として置いてをこう
私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」

(45～55行)

「ああ、王は剛巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちやんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞ひなど決してしない。ただ、——」と言ひかけて、メロスは足もとに視線を落し瞬時ためらひ、「ただ、私に情をかけたいつもりなら、處刑までに三日間の日限を與へて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ歸つて來ます。」

「ばかな。」と暴君は、嘎れた聲で低く笑つた。「とんでもない嘘を言ふわい。逃がした小鳥が歸つて來るといふのか。」

「さうです。歸つて來るのです。」メロスは必死で言ひ張つた。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の歸りを待つてゐるのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンテウスといふ石工がゐます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行かう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに歸つて來なかつたら、あの友人を絞め殺

して下さい。たのむ。さうして下さい。」

直截で簡潔な小栗詠「人質」に対し、「走れメロス」では、王に願い出るメロスの言葉に「です、ます」体が用いられている。「単純な男」メロスの一瞬の逡巡を描きつつ、僅かな内省の陰影を読者へ伝える、優れた性格描写である。

それを聞きながら王は殘虐な氣持で北叟笑んだ
 そして少しのあひだ考へてから言つた
 「よし、三日間の日限をおまへにやらう
 しかし猶豫はきつちりそれ限りだぞ
 おまへがわしのところに取り戻しに來ても
 彼は身代りとなつて死なねばならぬ
 その代り、おまへの罰はゆるしてやらう」

(56～64行)

それを聞いて王は、殘虐な氣持で、そつと北叟笑んだ。生意氣なことを言ふわい。どうせ歸つて來ないにきまつてゐる。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。さうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも氣味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に處してやるのだ。世の中の、正直者とかいふ奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願ひを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日日には日没までに歸つて來い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとおくれて來るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるしてやらうぞ。」

「なに、何をおつしやる。」

「はは。いのちが大事だつたら、おくれて來い。おまへの心は、わかつてゐるぞ。」

小栗詠の最終行「おまへの罰は」を、太宰治は「おまへの罪は、」と変更している。

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が
 私の所業を憎んで
 磔の刑に處すといふのだ

しかし私に三日間の日限をくれた
 妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ
 君は王のところに人質となつてみてくれ
 私が縄をほどきに歸つてくるまで」

(65～69行)

メロスは口惜しく、地團駄踏んだ。ものも言ひたくなかった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言で首肯き、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出發した。初夏、満天の星である。

「走れメロス」で、セリヌンティウスは王城へ喚び出され、その場で「縄打たれた」。作品の構造に関わる、この変更については、後述する。

無言のままに友を親友は抱きしめた
 そして暴君の手から引き取つた
 その場から彼はすぐに出發した
 そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに
 急いで妹を夫といつしよにした彼は
 氣もそぞろに歸路をいそいだ
 日限のきれるのを怖れて

対応する「走れメロス」70～120行に、小栗訳「人質」からの引用はない。

小栗訳「人質」では1行にも満たない、妹の婚儀をめぐるくだりを、太宰治は大幅に拡張している。更に、続く川の氾濫の因となる豪雨は婚礼の夜に始まり、川辺へ到りつく前に降り止むという設定に変えている。「好きな小歌をいい聲で歌」う、メロスの「呑氣さ」を描き、第一の試練とのコントラストを強めるためだろうか。

途中で雨になった、いつやむともない豪雨に
山の水源は氾濫し
小川も河も水かさを増し
やうやく河岸にたどりついたときは
急流に橋は浚はれ
轟々とひびきをあげる激浪が
メリメリと橋桁を跳ねとばしてゐた

彼は茫然と、立ちすくんだ
あちこちと眺めまはし
また聲をかぎりに呼びたててみたが
繫舟は残らず凌はれて影なく
目ざす對岸に運んでくれる
渡守りの姿もどこにもない
流れは荒々しく海のやうになつた

彼は河岸にうづまり、泣きながら
ゼウスに手をあげて哀願した
「ああ、鎮めたまへ、荒れくるふ流れを！
時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに
眞晝時です、あれが沈んでしまつたら
町に歸ることが出来なかつたら
友達は私のために死ぬのです」

急流はますます激しさを増すばかり
波は波を捲き、煽りたて
時は刻一刻と消えていつた
彼は焦燥にかられた、つひに憤然と勇氣をふるひ
咆え狂ふ波間に身を躍らせ
満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた
神もつひに憐愍を垂れた

(120～134行)

ぶらぶら歩い

て二里行き三里行き、そろそろ全行程の半ばに到達した頃、降つて湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまった。見よ、前方の川を。きのふの豪雨で山の水源は氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一擧に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしてゐた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまはし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪に浚はれて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のやうになつてゐる。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を舉げて哀願した。「ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に眞晝時です。あれが沈んでしまはぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑ふ如く、ますます激しく躍り狂ふ。浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、さうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覺悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覽あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のやうにのた打ち荒れ狂ふ浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめつぶふ獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、つひに憐愍を垂れてくれた。

「走れメロス」の中で、小栗沢「人質」との直接的なつながりが最も多いのが、この「濁流の場」である。とりわけ前半部（120～128行）は、「人質」が喚起するイメージを幾分膨らませて散文化したに過ぎないと見えるほどだ。

第八連最終行の「友達」を「あの佳い友達」（128行）としたのは、韻律の制約のある詩の言葉を、語の配置という点でははるかに余裕のある散文において拡張したというより、先の「王城の場」（66～69行）での「佳き友」（66～67行）との対応ゆえだろう⁶⁾。作品冒頭の一文「メロスは激怒した。」の27行での再現をはじめ、語句の対応や回想の「引き戻し」は、作中、少なくない。読者のイメージの重層と同時に、同一もしくは類似の語の反復による、作品の、言語上の緊密化が図られているのだろう。「濁流の場」を例にとれば、131行の「愛と誠の偉大な力」は199行の「愛と誠の力」において、133行「なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ」は、228～229行「先刻、濁流を泳いだやうに群衆を掻きわ

け、搔きわけ」において再現される。

やがて岸に這ひあがるや、すぐにまた先きを急いだ
 助けをかした神に感謝しながら —
 しばらく行くと突然、森の暗がりから
 一隊の強盗が躍り出た
 行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺そうといどみかかった
 飛鳥のやうに彼は飛びのき
 打ちかかる弓なりの棍棒を避けた

「何をするのだ？」驚いた彼は蒼くなつて叫んだ
 「私は命の外にはなにも無い
 それも王にくれてやるものだ！」
 いきなり彼は近くの間人から棍棒を奪ひ
 「不憫だが、友達のためだ！」
 と猛然一撃のうちに三人の者を
 彼は仆した、後の者は逃げ去つた

(134～148行)

押し流されつ

つも、見事、對岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のやうに大きな胴震ひを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といへども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけてゐる。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切つて、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どつこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他に何も無い。その、たつた一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。」

山賊たちは、ものも言はず一齊に棍棒を振り擧げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲ひかかり、その棍棒を奪ひ取つて、

「氣の毒だが正義のためだ!」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さつ

さと走つて峠を下つた。

「人質」第十連第五行の「不憫だが、友達のためだ！」を、太宰治は「氣の毒だが正義のためだ！」と書き変えている。この「正義」は、この後、白昼の暑熱に動けなくなったメロスの胸中で一旦否定され（177行「正義だの、信實だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。」）、「岩清水の場」を経て再び獲得される（193行「私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。」）。構造上のマーカであると同時に、フィロストラトスとの対話で暗示される「もっと恐ろしくて大きいもの」（217行）へ深化させられる「何か」の起点であると筆者には思える⁷⁾。

やがて太陽が灼熱の光りを投げかけた
つひに激しい疲労から
彼はぐつたりと膝を折つた
「おお、慈悲深く私を強盗の手から
さきには急流から神聖な地上に救はれたものよ
今、ここまできて、疲れきつて動けなくなるとは
愛する友は私のために死なねばならぬのか？」

(148～153行)

一氣に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と氣を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、つひに、がくりと膝を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。眞の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまへを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。

韻律のためか、試練の順番を逆順（強盗→濁流）としたシラーに対し、太宰治は正順に戻している。後の168行でも同様である。

シラーの原詩にはない「勇者」の称号が使われるのも、この152行が初めて

である。メロスの内的独白中に登場したこの語は、その後、156行と192行、そして作品を締めくくる255行に現れる。メロスが自らを呼ぶ152、192行では「眞の勇者」、語り手がメロスを指す156、255行では「勇者」である。

「人質」の対応箇所を欠く、「走れメロス」153～180行の独白で太宰治は、「不信」、「信實」、そして「信じる」の活用形を散りばめつつ（特に、110行に初めて現れた「信實」は、この内省のくだりで3度、用いられている）、68行以降、現れなかった「セリヌンティウス」という個人名に4度、言及し、また、メロスの道程と王との対論を短くまとめた後に、メロスに自らを「不名譽の人種」「裏切り者」（174行）「醜い裏切り者」（179行）と断罪させる。（176～177行には、妹夫婦への短い言及が挟まれている。）

ふと耳に、潺々と銀の音色のながれるのが聞こえた
 すぐ近くに、さらさらと水音がしてゐる
 じつと聲を呑んで、耳をすました
 近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに
 冷々とした清水が湧きでてゐる
 飛びつくやうに彼は身をかがめた
 そして焼けつくからだに元氣をとりもどした

（181～188行）

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れてゐるらしい。よろよろ起き上つて、見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出てゐるのである。その泉に吸ひ込まれるやうにメロスは身をかがめた。水を両手で掬つて、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覺めたやうな氣がした。歩ける。行かう。肉體の疲勞恢復と共に、わづかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。

小栗訳「人質」の中で、「濁流の場」と並んで、この「岩清水の場」（特にその前半部）は、読むものに鮮やかな印象を残す。太宰治は、擬態語までも転用

している。ただし、第七行の「元氣」は、「義務遂行の希望」「名譽を守る希望」と言い換えられている。

「人質」への対応箇所を持たない、「走れメロス」186～194行では、再び走りだしたメロスの内面が描かれる。

193行の「正義」には既に言及した。147行「氣の毒だが正義のためだ！」を一方の柱として、メロスの第二の試練の枠を形作っていると筆者には思える。同時に、この147行に対応する「人質」第十連第五行（「不憫だが、友達のためだ！」）を下敷きにしてみれば、白昼の暑熱による試練を経た後に再び獲得された「正義」は、「身代りの友を救ふ爲」「王の奸佞邪智を打ち破る爲」（113～114行）という、以前の具体性をもはや有していない。事の成否にかかわらず「信頼に報いる」ためだけに行動するという、一種の至上命令へ昇華されているように思える。

太陽は緑の枝をすかして
 かがやき映える草原の上に
 巨人のやうな木影を亘がいてゐる
 二人の人が道をゆくのを彼は見た
 急ぎ足に追ひぬこうとしたとき
 二人の會話が耳にはいつた
 「いまごろは彼が磔にかかつてゐるよ」

（195～198行）

路行く人を押しわけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のやうに走つた。野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越え、少しづつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走つた。一團の旅人と颯つとすれちがつた瞬間、不吉な會話を小耳にはさんだ。
「いまごろは、あの男も、磔にかかつてゐるよ。」

第十三連「岩清水の場」からの時間の経過を示すためだろう、シラーは3行

にわたって夕刻の情景を描き出しているが、太宰治は、わずかに「少しづつ沈んでゆく太陽」（196～197行）という言葉で時刻を暗示するのみ⁸⁾で、「走る」メロスに集中している。

「風態なんか」には構わず（200行）、口から血を噴きながらも（201行）走り続けるメロスが描かれる「走れメロス」198～201行（「人質」への対応箇所がない）では、小栗訳「人質」の第十七連最終行に現れる「愛と誠の力」という対句の先取りを確認しておきたい。この句は既に131行に、「愛と誠の偉大な力」という形で記されていた。

胸締めつけられる想ひに、宙を飛んで彼は急いだ
 彼を息苦しい焦燥がせきたてた
 すでに夕映の光りは
 遠いシラクスの塔樓のあたりをつつんである
 すると向ふからフィロストラトスがやつてきた
 家の留守をしてゐた忠僕は
 主人をみとめて愕然とした

「お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません
 いまはご自分のお命が大切です！
 ちょうど今、あの方が死刑になるところです
 時間いっぱいまでお歸りになるのを
 今か今かとお待ちになつてゐました
 暴君の嘲笑も
 あの方の強い信念を變へることは出来ませんでした」――

「どうしても間に合はず、彼のために
 救ひ手となることが出来なかつたら
 私も彼と一緒に死のう
 いくら粗暴なタイラントでも
 友が友に對する義務を破つたことを、まさか褒めまい
 彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ

愛と誠の力を知るがよいのだ！」

(201～220行)

見える。はるか向ふに小さく、シラクス

の市の塔樓が見える。塔樓は、夕陽を受けてきらきら光つてゐる。

「ああ、メロス様。」うめくやうな聲が、風と共に聞えた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリメンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でございます。むだでございます。走るのは、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちやうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かつた。おうらみ申します。ほんの少し、もうちよつとでも、早かつたなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思ひで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめてゐた。走るより他は無い。

「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平氣でゐました。王様が、ざんざんあの方をからかつても、メロスは来ます、とだけ答へ、強い信念を持ちつづけてゐる様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの爲に走つてゐるのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは氣が狂つたか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、間に合はぬものでもない。走るがいい。」

フィロストラトスに関する変更については後述する。

メロスとフィロストラトスの対話における、シラーと太宰治の差異は、言うまでもなく、それぞれのメロスの最後の言葉に現れている。

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた
 すでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た
 周圍に群衆が無然として立つてゐた
 繩にかけられて友達は釣りあげられてゆく

猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた
 「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ「殺されるのは！
 彼を人質とした私はここだ！」

(221～231行)

言ふにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を盡して、メロスは走つた。メロスの頭は、からつぼだ。何一つ考へてゐない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合つた。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが歸つて来た。約束のとほり、いま、歸つて来た。」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉がつぶれて哽れた聲が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に氣がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、繩を打たれたセリヌンテイウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだやうに群衆を掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにある！」と、かすれた聲で精一ぱいに叫びながら、つひに磔臺に昇り、釣り上げられてゆく友の兩足に、齧りついた。

がやがやと群衆は動揺した
 二人の者はかたく抱き合つて
 悲喜こもごもの氣持で泣いた
 それを見て、ともに泣かぬ人はなかつた
 すぐに王の耳にこの美談は傳へられた
 王は人間らしい感動を覺えて
 早速に二人を玉座の前に呼びよせた

(231～244行)

群

衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、とロ々にわめいた。セリヌンテイウスの繩は、ほどかれたのである。

「セリヌンテイウス。」メロスは眼に涙を浮べて言つた。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」

セリヌンテイウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右

頬を殴った。殴つてから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つた。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言ひ、ひしと抱き合ひ、それから嬉し泣きにおいおい聲を放つて泣いた。

群集の中からも、歎歎の聲が聞えた。

太宰治が挿入した、メロスとセリヌンティウスの殴り合いの場面は、ヒュギヌスの説話をもとにシラーが描き出した友情の物語に、さらに高揚した「美談」の調子を加えている。

しばらくはまぢまぢと二人の者を見つめてゐたが
 やがて王は口を開いた。「おまへの望みは叶つたぞ
 おまへらはわしの心に勝つたのだ
 信實とは決して空虚な妄想ではなかつた
 どうかわしをも仲間に入れてくれまいか
 どうかわしの願ひを聞き入れて
 おまへの仲間の一人にしてほしい」

(244～248行)

暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめてゐたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、かう言つた。

「おまへの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信實とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへの仲間の一人にしてほしい。」

小栗詠「人質」第十九連5～7行を見る限り、「王」は刑場にいなかつたと判断できる。対して、「走れメロス」では、メロスの帰着から殴り合いを経て抱擁へいたる一部始終が、ディオニスの眼前で展開される。暴君の改悛の言葉がよ

り強く読者に響くのは後者だろう⁹⁾。

「走れメロス」を閉じる、群衆の歓呼と、少女によるマントの献呈の場（249～255行）は、もちろん、「人質」にはない。

小栗訳「人質」の無駄のない筋の展開と簡潔な文章は、「走れメロス」の文体にも少なからぬ影響を与えただろう。他方、「人質」から「走れメロス」が創りだされる過程で施された付加と変更は、両作品のジャンルの違いを考慮しても、きわめて大きい。

「走れメロス」創作に際し、シラーの物語詩に太宰治が加えた最大の変更は、メロスの位置づけとセリヌンティウスの捕縛であると筆者は考える。

シラー＝小栗の「人質」では、メロスはシラクス市の住人である。これに対し太宰治は、メロスを「羊と遊んで暮して来た」（2行）、村の牧人と設定した。この変更に応じて、「人質」第八連6～7行「町に歸ることが出来なかつたら / 友達は私のために死ぬのです」は、「王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」（128行）に変えられている。

フィロストラトスの設定にも変更が加えられた。小栗訳「人質」でフィロストラトスは、メロスの留守を守る「忠僕」である（第十五連6行、このくぐりだりにはメロスが都市住人である証左ともなる）。太宰治は、石工（この設定もシラーにはない）セリヌンティウスの弟子とした。

小栗孝則が『新編シラー詩抄』の「人質 譚詩」に加えた「註解」に、太宰は目を通していた¹⁰⁾。メロスの「友達」の名「セリヌンティウス Selinuntius」は、「人質」本文ではなく、この「註解」にしか現れない。同様に「ディオニス」は、本名を「ディオニシウス Dionysius」と言い、紀元前400年頃のシシリア島東海岸、シラクスを治めていた旨も、この「註解」に記されている。

古典古代ギリシア文化隆盛期の羊飼いという設定が、「走れメロス」発表当時の読者にどのようなイメージを抱かせたか、筆者には不明である。しかし、少

なくとも太宰治にとって、メロスの妹の婚礼に描いたように、一徹で純朴な、メロスと一緒に「生涯暮らして行きたい」と願うような良い人たち（91行）だったろう。一方の極端に暴君ディオニスが位置するような都市住民ではない。

都市と周辺部のコントラストは、王とメロスの対論に具体化されている。シラーの物語詩では、暴君殺害未遂のメロスの動機が不明であると同時に、彼に三日の猶予を与える王の心中についても詳述されていない。小栗訳「人質」第三連3行をほとんどそのまま、「それを聞いて王は、殘虐な氣持で、そつと北叟笑んだ。」と採用した（56行）後に太宰治は、約4行にわたってディオニスの胸中を代弁してみせる。自らの人間不信を他人の生命を以って公に証明してみせようという王の意図と、妹に向かって「人を疑ふ事と、それから、嘘をつく事」が「一ばんきらひなもの」だと明言する（99～100行）メロスの性格の対比を明確に示すには、太宰治にとって、メロスを王の圏外者とする必要があったのだろう。メロスの人物設定の変更によって、物語を内側から駆動する「信實」というモチーフが鮮明化されたのである。

セリヌンティウスの捕縛（と解放）は、作品の外形に関わる変更である。

小栗訳「人質」第四連1行と第五連1～2行を見る限り、シラーの原詩において、メロスはおそらく王の警吏などとともに王城を出て、自ら友人を訪問し、その場から妹のもとへ向かっている。

「走れメロス」の場合、セリヌンティウスは「深夜、王城に召され」（66行）、メロスの申し出を受け入れる。太宰治は、「セリヌンティウスは、縄打たれた。」と68行に記している。

この68行に対応するのが、232～233行の「セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。」という、段落末尾の一文である（この後に、友人二人の殴り合いの場が続く）。小栗訳「人質」にセリヌンティウスの解放を描くくだりはない。

いずれも王の居城で演じられる、この2場面に挟まれて、メロスの孤独な闘

いが描かれるという点に着目すれば、「走れメロス」は簡潔な三部構成より作られていると言えるだろう。

セリムンテイウス捕縛（66～69行）に先行しているのは、シラクス街上のメロス（1～27行）と、メロスとデイオニスの対論（28～65行）である。

同一の文を冒頭と結尾に置き、「呆れた王だ。生かして置けぬ。」というメロスの言葉で次の場へつなぐ、この第一場は、全篇の「序」と見なしてよい。続く第二場では、作品を動かしていく「信實と不信」のモチーフが提示される。

王の面前でのセリムンテイウス捕縛の後、メロスは「すぐに出発し」（69行）、晴れ渡った初夏の夜空を戴いて「急ぎに急いで」（70行）村に帰り着く。ここで太宰治は、「走る」という動詞を用いていない。全255行の「走れメロス」の中で、動詞「走る」が初めて現れるのは、112行、段落末尾に置かれた「雨中、矢の如く走り出た。」である。

シラーの原詩で用いられているのは、主として“eilen”（急ぐ）とその派生形である（小栗孝則も訳中に「走る」という語を用いていない）。わずかに、第十四連5行の“eilenden Laufes”にシラーは“Lauf”を用いているが、この二格の場合も意味の強勢は“eilend”の方にあるだろう。小栗は「急ぎ足に」と訳している。

メロスを「走ら」せたのは、太宰治である。先述した112行（この段落中、110行には「信實」という言葉が作中で初めて現れている）に続く次の段落では、最初の2行（113、114行）に「走る」とその変化形が4個、使われている。村からの出発という、メロスの試練の始まりがすなわち、作品中心部の始まりであることを、太宰治は、表題に掲げながらも、ここまで（敢えて）控えていた動詞「走る」の採用で、読者に鮮やかに示したのだろう。

しかし、この動詞は、その後も慎重に用いられる。119行（「そんなに急ぐ必要も無い。」）と136行（「すぐにまた先きを急いだ。」）では「急ぐ」が採用され、

その後、148行では、山賊を打ち倒し「さつさと走つて峠を下つた。」と軽く使われている。白昼の暑熱で動けなくなったメロスの内的独白では二度、158行（「動けなくなるまで走つて来たのだ。」）と167行（「セリヌンティウス、私は走つたのだ。」）において、ともに回想の過去形で現れる。

物語中の「現在」において再びこの動詞が使われるのは、189行末の「走れ！メロス。」である（これに先行して、この段落には「義務遂行の希望」（185行）「名譽を守る希望」（185～186行）という言葉が置かれている）。

この後、「走る」は、192行、197行、199行において用いられ、「フィロストラトスとメロスの対話の場」（203～220行）では10回にわたって使われ、沈みゆく太陽と闘いながら、ひたむきに「走る」メロスの姿を読者に伝えている。

その直後、221行と222行の二個の「走った。」の後に「間に合つた。」で閉じられる段落に続く「王城の場」には、この動詞は全く現れない。

標題に掲げた、この動詞「走る」を、作品の中間部において太宰治は、きわめて意図的に使用しているのである¹¹⁾。

「走れメロス」中間部は、複数の「場」から構成されている。ただし、個々の「場」が独立した段落としてまとめられているのではない。それ故、行番号を付して、以下に書き出してみたい。（ ）内の漢数字は、それぞれの「場」が含む行数である。

「帰村と婚礼」：70～107行（三十八行）

「朝と出発」：108～112行（五行）

「午前」：113～120行（八行）

「濁流」：120～138行（十八行）¹²⁾

「山賊」：138～148行（十一行）

「炎天」：148～180行（三十三行）

「岩清水」：181～189行（九行）

「再出発」：190～194行（五行）

「夕暮れ」：195～202行（八行）

「フィロストラトスとの対話」：203～220行（十八行）

「王城への到着」：221～224行（四行）

ここで再び、メロスの「走る」という行為に着目したい。

「矢の如く走り出た」（112行）メロスが「走る」のを止めるのは、150行（「つひに、がくりと膝を折つた。」）である。メロスの第一の「走り」は、113～148行までの36行で描き出されている。

他方、メロスが再び「走り」出し、王城へ到着するまでの経緯には、190～224行の35行が充てられている。（第一と第二の「走り」にはそれぞれ、「朝と出発」（5行）と「岩清水」（9行）が先行する。）

中間部の初めに置かれた「帰村と婚礼」は33行を、メロスが走るのを止めた「炎天」は33行を占めている。

「走れメロス」中間部は30行代のまとまりを単位として構成されたと考えられる。

かなと漢字の使用数による拍数の差や、例えば物語を進行させる地の文と、その進行の中での登場人物たちの発言に現れるような、個々の行に配置される文字数の違いは当然、あるとは言え、1行45字の筑摩版「太宰治全集」でおおよそ30行の分量が、おおまかなまとまりを成している点では、デイオニスの王城を舞台とした両翼部も同様である。先に全篇の序章と位置づけた、1～27行の「シラクス街上の場」を除けば、次の「メロスとデイオニスの対論」には38行（28～65行）が充てられ、メロスが「急ぎに急いで」（70行）村へ帰りつく、中間部の冒頭を後ろに控えた、「対論」に続く「セリヌンティウス捕縛」は4行

(66～69行)を占めている。そして、セリヌンティウスの処刑場にメロスが到着した後の王城での諸場面は、225～255行の合計31行で描かれている。

物語の主要な場面にほぼ同量の文章を配し、その間を短い1段落でつなぐ(無論、「走れメロス」中のこれらの段落は、物語における意味においても、言語上の密度においても「つなぎ」という以上だが)という構成意識を作者の側に想定できるように思える。

自覚の有無に関わらず、読者はこのような作品の構造から何らかの印象を受け取るだろう。場面配置の均衡は、「走れメロス」に一種「古典的」な晴朗さを醸成している要因の1つであると考えられる。

このような作品構成への意志は、中間部でメロスに与えられる試練と救いにも見て取れる。

小栗詔のシラー「人質」に描かれるそれは、王城出発後の豪雨による氾濫→強盗の襲撃→白昼の暑熱→岩清水による回復→沈みゆく太陽との競争である。既に該当箇所と比較によって見たように、太宰治は、第一の試練である氾濫を引き起こす豪雨を「婚礼の場」へ移した(「祝宴に列席してゐた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、」87行)。メロスの出発後、ほどなくしてこの雨は止み、メロスが「好きな小歌をいい聲で歌ひ出した」(120行)後に、「濁流の場」が置かれている。つまり、豪雨(水)→晴天(太陽)→濁流(水)→山賊→炎天(太陽)→岩清水(水)→沈みゆく太陽(太陽)となる。「水」と「太陽」が、「山賊」を軸に交互に配され、それぞれがメロスに試練を課し、また、救いを差し出すのである。小栗詔「人質」に依拠するのみであれば、このようなシンメトリカルな構成は生じないだろう。

小栗孝則の翻訳を通して、太宰治はシラーの“Die Bürgschaft Ballade”から物語の素材とストーリー展開の大枠を、また、小栗の訳文から叙事的叙述のための引きしまった文体を受け取った。そこに作家が加えた様々の手技の多くが、

一個の言語構造物の構築への意志に発していると筆者には思える¹³⁾。

* 使用テキストならびに主要参考文献

- ・ 太宰治：『太宰治全集4』 1998年 筑摩書房
- ・ 長部日出男『桜桃とキリスト』 2005年 文春文庫
- ・ シラー：小栗孝則訳『新編シラー詩抄』 1937年 改造社
- ・ Schiller : Bellermann, L. (hrsg): "Schillers Gedichte", um1915, Bibliographisches Institut. Leipzig und Wien (以下、Bellermann と略す)

* 註

- 1) 『桜桃とキリスト』、236～260ページ。
- 2) 拙論「シラーの“Die Bürgschaft Ballade”と小栗孝則訳「人質 譚詩」、九州工業大学大学院情報工学研究紀要（人間科学）第26号（平成25年3月発行）、15～44ページ参照。
- 3) 角田旅人：「走れメロス」材源考」（1975年）。筆者が眼にしたのは、香川大学学術情報リポジトリでの公開版である。<http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metadata/3469>を参照願いたい。
- 4) 長部の論は、「走れメロス」の叙事的文体に見え隠れする、太宰治本来の「口説き」の文体を探りだしている。
- 5) 第五連には、セリメンティウスを指す“der treue Freund”という語があるが、この形容詞“treu”には、作品の主題を形成するほどの役割が与えられているとは言えないだろう。
- 6) 163行には、「佳い友と友」という言葉が使われている。
- 7) 145～146行の「飛鳥の如く」は、小栗訳「人質」第九連6行「飛鳥のやうに」に由来すると思われる。しかし、メロスの防御のこの形容を、太宰治は攻撃の形容へ転用している。シラーの原文の第九連第五～七行は“Den Pfad ihm sperrend, und schnaubet Mord / Und hemmet Wanderers Eile / Mit drohend geschwungener Keule.”である（Bellermann, S.232f.）。「彼の前で小径をふさぎ、そして殺そうと息を荒げ、／急ぐ旅人をはばむ／脅すように振り上げた棍棒で」であり、メロスの動作は記されていない。小栗の誤訳であろう。
- 8) もっとも、「走れメロス」の場合、先行する193行に「ああ、日が沈む。ずんずん沈む。」と既に記した後なので、あらためて読者に時刻を明示する必要はなかったとも言える。
- 9) 「走れメロス」の、いわば「メッセージ」とも受け取られかねない王のこの言葉は、小栗訳「人質」から、そのまま転用されている。むしろ、「引用」と言っても良いだろう。「濁流の場」や「岩清水の場」の転用にあつてすら、幾分かの変更が加えられていた。句読点を施したのみの、この転用に、現代で言う「コピペ」の感覚を読み込むことも不可能ではないように思われる。

- 10) 『新編シラー詩抄』419ページ。この点は、角田旅人が既に指摘している。
- 11) メロスが（ともに、眠りの後に）走りだす、112行と189行直後の、ともに段落冒頭を成す、113行、190行の第一、二文を見てみたい。113行は「私は、今宵、殺される。殺される爲に走るのだ。」と始められている。句読点によって指定された休止を1拍として（「ワタシハ、コヨイ、コロサレル。コロサレルタメニハシルノダ。」）読めば、このくぐりは15拍+14拍である。190行（「私は信頼されてゐる。私は信頼されてゐる。」）は、14拍+14拍である。中間部のメロスが文字通り体現する「走る」という行為の始めに、ともに内的独白として、ほぼ同一の拍数で据えられた、この2文は、両者の対応関係を読者にほのめかしていると思える。即ち、妹の婚礼の翌朝、目覚めてから、「あの王に、人の信實の存するところを見せて」（110行）やるために、「雨中、矢の如く走り出た」（112行）後の独白（113～115行、或いは、115～117行の地の文に続く117～120行までも含めて）までのくぐりと、まどろみの後に岩清水で力と「義務遂行の希望」「名譽を守る希望」を得てから、「私を、待つてゐる人」「静かに期待してくれてゐる人」（187～188行）に「信じられてゐる」（188行）が故に、「信頼に報いなければならぬ」（189行）と再び走り出た後の独白（190～194行）までの、この二箇所の対応である。
- 12) 「濁流の場」では、129行で一旦、段落が改められている。しかし、この段落は、「山賊の場」と「炎天の場」を含み、「岩清水」直前の180行まで続く。小栗訳「人質」の第八、九連の連構成を引き継いだのだろうか？
- 13) シラーの原詩と比較して、「走れメロス」の唯一の弱点とも思えるのは、強盗の出現をディオニスの命令と思わせるメロスの言葉、「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。」（144行）である。メロスの推測の当否は不明のままだが、人間不信の体現者というべきディオニスの性格は、この一言で弱められてしまう。しかし、太宰治の意図は、作品世界の単一性の保持にあったと筆者は考えたい。作品中の事象のすべてを相互に関連づけ、作品世界を独立した結晶体として創り上げようとしたのだろう。